平安時代よりあと、いわゆる天国にいけない人は、

地獄（じごく）におちるということが信じられました。

地蔵（じぞう）は、その地獄（じごく）での大変なことから人々を救うものとして信じられるようになりました。

やがて、人々の災難（さいなん）の身代わりとなるものとして、特に子どもを守るものとして信じられるようになりました。

また、死んでしまった子ども、生まれる前に死んでしまった子どもを供養（くよう）するためのものとしても信じられるようになりました。